



「待ってー止まってーそれが聞けないかのように走って行く男の子。それは幼稚園の制作活動の時間、先生が説明を始めた時でした。急に飛び出し外に走って行く男の子を、必死に追いかける先生。ほづきを持っては振り回し、ハサミを持っては自分の髪を切ろうとする男の子を、抱え込むようにして止めさせる支援員。お遊戯も、絵本の時も、ただ教室中を走り回る男の子。

「おはようー」声をかきつけても、目を合わず「ともなへ通り過ぎて行く男の子に、かかわる事ができない友達。

「この幼稚園で預かって、本当にこの子のためになるのだろうか」不安を話す園長先生。ほかの友達に迷惑がかかってしまつて心配する母さん。けれど、私が幼稚園に訪れた時の男の子のお母さん、そして彼を受け入れた幼稚園のこどもです。

「男の子の安全のためだけに、彼のしていることをただ合わせたとしてもかできない」と話す先生に「先生たちが彼に望むことをありのまま教えてください。どうしてかできないのか、どうすればできるのか、私も一緒に考えます」と伝えました。

先生が彼を、抱え込んでまでみんなと掃除に参加させようとしていたのは「男の子と友達がいかに意識し合ひ、学び合つてほしい」という願いからでした。不安を抱きながらも彼を幼稚園で受け入れたのは「障がい」という言葉のない学校・地域をつくりたい」と願う園長先生の思いからでした。

私は3年前、長男が生まれ、夫の実家である金武町に移り住みました。子を持つ母として、誰もが子どもの自分らしい成長を願つてほしい。私もその一環として、地域の中にいま学校に通えない子、学校で走り回るわが子に悩むお母さんがたくさんいることを知りました。

作業療法士として、このままではいけない。この地域に何かできることがある！と感じました。その思いに賛同してくれた嘉菜幼稚園の園長先生と共に、今、学校に通う子どもたちが、自分らしく成長していけるための支援相談をさせていただいています。

作業療法士は、人が生き生きと人生を営めるよう、その人と地域が力を持てることを目標にしています。

そのため学校では、「その子らしく成長してほしい」と願う先生の思いがかなうよう、先生が

か、どうすればできるのか、それを知るには、その子のありのままの様子(作業)を見ることから始まります。掃除の時間、男の子が何をしているのか。いつ始めて、いつ、なぜ止めてしまうのか。ほづきのごきもち、どんな表情なのか。彼の「いつのしきさから、どうしてできないのか、どうすればできるのか、男の子が何を求めているのか、作業療法士は考えます。

男の子は、自分より大きなほづきのごきもちを、いいのからからずいしました。床はどこからふくの？とまでふくの？いつ終わるの？ルールの無い床掃除に、始めることさえできませんにいました。

その思いを受け取った先生は、深くうなずき、何か開けた表情をしていました。

それから2週間後、先生が「見せたい」ことがある「とつれしつ」に言いました。そこには、みんなと一緒に掃除をしている男の子がいました。

先生は彼の身体に合わせ、小さなほづきを探し、床に数字を振って、スタートの「から」の数字の十一まで、ふいていくルールをつくらせてくれました。

床に振られた数字は、床ふき競争のスタートになり、友達が数字を追ってふく姿を見て、男の子は、みんなの輪に入っていたそうです。そして、男の子の後ろにつながつてふくこと、男の子が向かってふくものに正面からふくかってじゃんけんする様子。これらはみんな子どもたちが自らつくった、彼のかかわり方だと先生は話しました。

# 子ども達の『作業』をみつめて

沖縄県教育長賞 金武町婦人連合会 仲間 知穂

子どもたちと向き合っていることを支えます。そのため、私は学校生活という「作業」を通して見えてくる、その子自身の困っていること、望んでいることを先生に伝えています。

ある日、みんなが外で遊んでいる時、男の子は急にスリッパと走って行って、園庭の遊具を棒でカンカンたいて回っていました。「ああ。みんなの輪に入りたいって…彼の意思表示なんだな」私は感じました。

ほづきを振り回すことも、教室を走り回ること、掃除を、創作活動をみんなと一緒にやりたい…でもほづきない！と声にならない、男の子の心の叫びでした。

(原稿の一部を割愛しました)

この活動を理解し、支えてくれる家族と共に、これからも地域社会に貢献できる活動を続けていきたいと思っています。